

Title	侯景の亂についての一考察
Sub Title	On the revolt of Hou-Chin (侯景)
Author	竹田, 龍兒(Takeda, Ryoji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.3 (1956. 12) ,p.34(262)- 59(287)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19561200-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

侯景の亂についての一考察

竹 田 龍 兒

魏晉南北朝時代を特徴付けている貴族制も、晉代が全盛期で、南北朝に入ると固定して新しい發展は殆んど見られなくなつた。そのみでなく、他方に於ては貴族主義とは相容れない種々の要素が軍閥政權たる南朝の諸君主によつて政面に導入されさへしている。所謂寒人の登用や試験制度の獎勵強化などが即ちそれである。この點から言つても南北朝時代には貴族主義は既に衰頽期に入つたと認むべきであるが、六世紀中葉以後、即ち梁の武帝の末年以後に至つて更にこの傾向に拍車をかける様な事件が相ついで發生し、それがために南朝の貴族社會は可盛り深刻な様相を呈し來つた。今その中から先づ順序として侯景の亂を取り上げ、それについて若干の考察を試みたいと思ふ。

(一)

侯景の出自について梁書の本傳⁽²⁾には朔方の人とも鴈門の人とも言い、南史⁽³⁾には懷朔鎮の人とあつて甚だ詳かでないが、彼が中國の邊境地方の産であることだけは疑いがない。北齊書の神武紀下に、平素から高澄を輕視していた侯景が或る時司馬子如に向つて「王(高歡)在り、吾敢て異あらず。王なくんば吾、鮮卑の小兒と事を共にする能はず」と

言つたことが見えている。卒然としてこれを讀めば彼は全く間違ひのない漢人であつた如き印象を與えられるのであるが果して彼は懷朔鎮邊りに配屬されていた漢人の子孫であつたのだろうか。

梁朝の人士達は侯景の人間性について痛烈な批判を浴せているが、その中の一人の傳岐は、梁朝が侯景の持ち出した和平條件を呑もうとしているのを知つて、「戎狄は獸心なり、必ず信ずべからず」と眞向から反對を唱えた。太清三年九月、吳興が陥つて太守の張暉が執えられた時、侯景は暉の一子だけは助命しようとしたのに對して暉は「吾が一門、已に鬼録に在り、爾、虜に就きて恩を求めず」と罵つて一族十餘人が殺害されている。また王僧辯と陳霸先が白茅洲に血盟した時の盟文にも「賊臣侯景は凶羯の小胡なり、天に逆うこと狀無く、姦惡を構造し」云々と記して、梁人は彼を呼ぶに戎だの羯だの虜だの語を以てしている。固より彼らは大いなる憎惡と侮蔑を込めてこれらの語を用いているのであるから、その點については一應考慮する必要はあろう。

建康陥落後、侯景は太極殿の本堂に於て始めて武帝に見えて帝から「卿は何州の人にして敢て此に至る」などの下問を受けたが、景はそれに對して全然返答が出来なかつたと傳へられている。王者らしい風格と威容に壓せられて流石の侯景も油汗を流すだけであつたと言はれるが、何ら誇るに足るべき家系も有しない素性の曖昧な彼としては事實返答に窮せざるを得なかつたであろうと思はれる。後に彼が梁を篡つて漢帝を稱するに至つた時のことである、謀主の王偉が七廟を立てんことを申請し、併せて七世の諱を請うたところ、景は「前世は吾復た憶えず、唯だ阿爺は標を名づけ且つ朔州に在り。伊なんぞ來りて是に噉うを得ん」と答えたので、衆みなこれを聞いてひそかに笑つたと南史に見えている。こゝに言う朔州は言うまでもなく懷朔鎮に他ならない。以上の諸資料から判斷するに恐らく彼は羯種かなんかに屬する

北族の出身者であつたものと思う。彼の率いる精兵も「皆羌胡雜種」であつたと陳書殷不害傳は傳えている。

侯景は梁書本傳には「驍勇にして旅力あり、騎射を善くす。以て選ばれて北鎮の戍兵となる」とあるけれども、南史や通鑑はこれに反して「景は右足短く弓馬は其の長ずるところに非ず、所在唯だ智謀を以てす」と記している。太清二年正月に破石から淮水を渡つて南に敗走中の彼に向つて「跛脚奴、何をかなすや」と詬つて殺された男がいるのを見ても彼が一般には跛者として知られていた事がわかる。

彼は五二四年に六鎮の亂が起るとこれに加つて頭角を現し始め、一時爾朱榮の部下となつていたが、榮の歿落後は高歡の配下に入り、東魏において司徒にまで登り、河南道大行台として河南方面の軍事を委ねられていた。ところがかねてから侯景の人となりを知りその異圖あるを見抜いていた高歡は、その病篤きに臨んで世子澄に對し、「侯景は狡猾にして計多く、反覆知り難し。我死するの後は必ず汝が用をなさざらん」とねんごろに遺戒したが、果せる哉、歡が歿すると間もなく侯景は東魏に叛いた。

彼が叛を企てた直接の原因は、高澄が詐つて彼を召して執へ殺さんとしたので、それを察知した景は身の不安を感じて意を決したのだという。即ち通鑑には「侯景、自ら念う、已に高氏と隙ありと。内自ら安んぜず、辛亥、河南に據りて叛き、魏に歸す」(卷一六〇、太清元年正月の條)と記している。

翌二月、景は行臺郎中の丁和を梁に遣して上表し函谷以東、瑕丘以西の十三州(豫・廣・郢・荆・襄・兗・南兗・濟・東豫・洛・陽・北荆・北揚)を以て内屬せんことを求めた。これに於て武帝は群臣を召して景の降を納れるか否かを議せしめた。尙書僕射謝舉らは叛臣を納れることは東魏との親善關係を惡化する惧ありとして反對し、廷議は可成り沸騰

した。それら大多數の反對論者の胸底には侯景その人に對する深い疑惑と不信とが横たわつていたに相違ない。

武帝は寵臣朱异の迎合的な意見を喜び、遂に群議を排して侯景の降を許し、景を河南王に封じ、使持節董督河南南北諸軍事大行臺に任じ、制を受くること後漢の大功臣鄧禹の故事の如くにした。

(二)

武帝が侯景の降を納れたのは、彼の力を利用して北朝に干渉を加へんとする下心から出たものであるとも見られる。通鑑によれば武帝は群臣をなだめて

然りと雖も、景を得ば則ち塞北清むべからん。機會は得難し。豈に宜しく膠柱すべけんや¹⁰とその抱負を洩らしている。これよりさき、武帝は魏の一族で梁に投降し來つた元法僧や北海王顥などを助けて北に還らしめ以て魏に武力干渉を加へんと企てたが、何れも失敗に終つていたのであるから、侯景からの使者に接して大いに食指を動かしたのも當然であろう。

武帝が侯景の内附を許したについては次の様な夢物語が傳へられている。侯景が内屬を請い來つた前年の或る夜のことである。武帝は夢に中原の牧守が皆地を以て來り降つたので梁では朝を擧げて慶を稱したとみ、寤めて大いに悦び、翌朝早速この事を朱异に告げ、且つ「吾、人となり夢少し、若し夢有るときは必ず實なり¹¹」と語つたが、後果して侯景が十三州の地を以て歸付を申し入れて來たので帝は「欣然として自ら悦び神と通ずを謂ひ、乃ち議して之を納」れたと梁書侯景傳は記している。なおこれに關する通鑑の記事は更に奇異で、帝が夢をみたのは是の歳の正月乙卯の夜であつ

たが、景の使者丁和の口から景が計を定めたのもやはり同じ正月乙卯のことであつたと聞いて武帝は「愈々之を神とす」と見えている。

今日の吾々には笑うべき迷信としか受け取れない事柄が當時の人々には實に大きな意義をもつてをり、往々にしてそれが獨り個人のみならず一國の運命にまで關係する場合があるに於ては、迷信の一語で簡單にこれを片付け去るわけにゆかないのを感じる。

魏晉南北朝時代に占候や曆運などの迷信思想が大いに流行していたことは、晉書・宋書・南齊書・隋書などの五行志を繙けば容易に認められるところである。梁書によれば當時侯景の亂の發生を豫言していた者が數人をつたらしい。周弘正はその一人で、かねてより「國家數年の後に、當に兵起ること有るべし」と豫言していたが武帝が景を納れたのを聞いた彼は「亂階此に在り」と嘆じたといふ⁽¹²⁾。また丹陽の陶弘景は頗る博學多識で陰陽五行風角星算等に明るく、華陽山に隠れ住んでいた。彼はかつて「夷甫任^ヘ散誕^ニ、平叔坐論^レ空、豈悟^ラ昭陽殿、遂作^ル單于宮^ニ」⁽¹³⁾なる一詩を賦して、時人が競つて玄理を談じ、武事などは顧みようとはしなかつたのを諷したが、それが箴をなして後年、昭陽殿に於て侯景による篡奪が行はれたと稱せられる。

梁代に老莊と易が三玄と稱して大いに世に行はれたことは顔氏家訓の傳へるところであつて、武帝も太子綱(簡文帝)も共に玄學を好み、太子の如きは國の安危を他處に常に東宮の玄圃に於て自ら老莊二書を講じておつたので、太子詹事の何敬容は「昔、晉代の喪亂は頗る玄虛を祖尙せしに由り、胡賊中夏を殄覆せり。今、東宮復た此を襲い、殆んど人事を非とす。其れ將に戎とならんとするか⁽¹⁴⁾」と慨嘆したと言われる。

敍上の迷信思想にしろ玄學にしろ何れも共通の思想的基盤の上に立つものであつて、それが一世を風靡していたとすれば、當時の社會なり政治なりを考へる者は當然この點にも眼を向けるべきであらう。

(三)

東魏は武定五年(五四七)正月、韓軌らを遣して侯景を討たしめ潁川を圍んだ。梁では司州刺史羊鴉仁らに命じて兵三萬を率いて急ぎ懸瓠(河南省汝南縣)に赴かしたためであるが、侯景は梁の援軍が到着しないので大いに懼れて更に西魏に降を請い救を求めた。西魏では尙書左僕射于謹が「景少きより兵に習い、姦詐測り難し、(中略)未だ兵を遣るべからず」と強く反對したが、丞相宇文泰は結局その請を容れ李弼・趙貴らを潁川に向わしめたのでこれを知つた東魏の韓軌は兵を引いて鄴に還つた。然るに程なく侯景の心情に疑いを懐くに至つた宇文泰は試みに彼に入朝を命じたところ、果して景は應じなかつたので、さきに遣した援軍を悉く引き上げさせて了つた。

これまで首鼠兩端を持する如き曖昧な態度をとつていた侯景も、ことごとくに至つては意を決して梁に降る以外に途がなかつた。

梁と東魏との國交は、武帝の普通元年(五二〇)以來杜絶えていたのを大同二年(五三六)東魏からの復交の申し入れがあつて復活し、その後は毎年兩國間に使臣の往來が見られた。通鑑の翌年七月の條に「時に南北好を通じ、務めて俊乂を以て相誇る。命を銜みて客に接するには必ず一時の選を盡す」とある様に兩國とも聘問使や接待官の人選には特に意を用い互に輸贏を競つた。これに對して西魏と梁との間は甚だ疎縁であつたらしく使節交換のことは殆んど見當らない。

西に西魏を控え南は梁と相對していた東魏では國內の人心統一に相當苦勞していたらしく、北齊書の杜弼傳に次の如く見えている。

高祖曰く、今、督將の家屬多く關西にあり、黑獺(宇文泰)常に相招誘し、人情の去留未だ定らず。江東、また一吳兒老翁蕭衍(梁武帝)なる者ありて専ら衣冠禮樂を事とす。中原の士大夫、之を望みて以て正朔の在る所となせり。我若し急に法綱を作りて相饒借せずんば、恐らくは督將は盡く黑獺に投じ、士子は悉く蕭衍に奔らん。則ち人物流散せば何を以て國を為めんやと。

梁が東魏の叛臣を納れたことによつて兩國の關係はこゝに再び斷絶し、武帝は同年八月、南豫州の刺史貞陽侯淵明(武帝の甥)を都督となし大舉して東魏を伐たしめることゝした。ところがその頃東魏では「侯景になお北望の心あるがごとし」という風説がしきりに行われていたが、そこへ會々景の舊部下の蔡遵道が歸つてきて「景に過ちを悔ゆるの心あり」と語つたので、高澄はこれに吉凶禍福を説いた勸告文を送つて降伏を呼びかけた。今その一部をこゝに引用してみよう。

忠臣の跡を踏まず、自ら叛人の地に陥り、力は以て自ら強くするに足らず、勢は以て自ら保つに足らず、烏合の衆を率いて累卵の危をなし、西は救を黑秦に求め、南は援を蕭氏に請い、狐疑の心を以て、首鼠の事をなし、入るも則ち秦人容れず、歸するも則ち吳人信せず、當今相視るに未だ其の可なるを見ず。……若し能く甲を巻きて來り朝し囊を垂れて闕に還らば當に豫州刺史を授け、即ち君の世を終らしめ、所部の文武は更に追攝せざるべし。進みては其の祿位を保つを得、退くも則ち功名を喪はず。君門の眷屬以て恙く、寵妻愛子も亦た送りて相還さん。仍つて通家をなし

卒に親好をなせ。食言せざる所皎日の如きあり……吉凶の理、想いて自ら之を圖れ。¹⁵⁾
當時まだ侯景の妻子が東魏において無事に生存していたことがこれによつて知られるのであるが、侯景はそれに對して骨肉に對する恩愛の絆を絶ち切つて飽くまで鬪う決意を示した返書を與へている。

(四)

九月には彭城（江蘇省銅山縣）を中心とする攻防戦が展開され、梁軍は東魏の名將慕容紹宗のために大敗を喫し、士卒數萬を失つた上、貞陽侯淵明らは東魏に捕虜となるに至つた。慕容紹宗はこの時梁の境内に和平勸告の檄を撒布している。檄は杜弼の筆になると傳へられ可成りの長文で、魏書の島夷蕭衍傳に全文が収録されているが、こゝでは通鑑から引用して置く。曰く

金陵は逋逃の藪、江南は流寓の地なるを以て辭を甘くし、禮を卑くし、熟を進め身を圖る。詭言浮説、抑と知るべし。……一人を獲て一國を失い、黃雀を見て深筭を忘るゝは智者の為さざる所、仁者の向はざる所なり、……侯景、鄙俚の夫を以て風雪の會に遭い、位三事に班し、邑萬家を啓く、身を揣り、分を量らば久しく當に止足すべし。然るに乃ち周章して向背し、離披して已まず。夫れ豈に徒然ならんや。意亦た見るべし。……若し吳の王孫、蜀の公子、歎を軍門に歸し、命を下吏に委せば、當に即ち客卿の秩を授け、特に驃騎の號を加うべし。凡百の君子、勉めて多福を求めよ。¹⁶⁾

その言うところは要するに、侯景は信用し難い人物であるから、彼の僞瞞に引かゝつて馬鹿を見るよりは、速かに戦

鬪を中止することの得策なるを説いたものである。

東魏のこの切崩し策に對抗すべく侯景は王偉を建康に派遣して武帝に一策を献ぜしめた。それは、魏の一族で先年梁に投降して来て太子舍人の官を得ていた元貞を擁立しようという計畫であつた。これに賛同した武帝は詔を下して元貞を咸陽王となし兵を授けて北に歸らしめることゝした。

侯景自身は士卒四萬・馬數千頭・輜重數千輛を擁し、退いて渦陽（安徽省蒙城縣東北）に駐屯していたが、慕容紹宗が大軍を提げて來り攻めるに會い、慘敗を喫して部衆は潰え去つた。身を以てその場を逃れ、硤石（安徽省鳳臺縣西南）にて淮水を渡つた彼は、散卒八百人ばかりを收め得て晝夜兼行で南走し、漸くにし壽陽（安徽省壽縣）に辿りつくことが出來た。時に太清二年（五四八）正月のことであつた。景は于子悅を建康に遣して敗戦を報告し罪を請はしめたが、武帝はその罪を問はなかつたばかりか彼を南豫州の牧に任じた。

この時光祿大夫蕭介は上表して

竊に聞く、侯景、渦陽に敗績せるを以て隻馬命に歸せしに、陛下、前禍を悔いず復た赦して容納すと。臣聞く凶人の性は移らず、天下の惡は一なりと。……侯景は獸心の種、鳴鏑の類なり、凶狡の才を以て高歡の翼長の遇を荷い、位、臺司を忝くし、任、方伯に居る。然るに高歡の墳土未だ乾かざるに即ち還つて反噬す。逆力逮ばずして乃ち復た死を關西に逃る。宇文容れず、故に復た身を我に投ず。……今既に師を亡ぼし地を失い、たゞ是れ境上の匹夫なり。陛下匹夫を愛して與國を棄つ、臣竊に取らざるなり、……臣竊に惟うに侯景は必ず歲暮の臣に非じ、郷國を棄つること屍を脱するが如く、君親に背くこと芥を遺つるが如し。豈に遠く聖德を慕い江淮の純臣となるを知らんや。事跡顯然た

り、惑を致すべきなし⁽¹⁷⁾

と切諫した。しかし武帝は「表をみて歎息すれども用うる能はず、再び過誤を犯すに至つた。武帝の性格とその寛仁慈悲の政治については森三樹三郎氏が近著「梁の武帝」の中で詳述されていて贅言を要しないところである。たゞ筆者はその後に一言、當時帝はすでに八十五歳の高齢に達していたという事實だけを附け加えて置きたい。やはり多少判断力が鈍つてきていたのではないかと疑はれるからである。

河南地区の舊境を略と奪回した東魏は梁に對して國交の回復を提議したが梁の容れるところとならなかつた。そこで高澄はさきに彭城の戦で捕虜となつて抑留中の貞陽侯淵明を利用しようとした。即ち國交が回復しさえすれば直ちに自分も歸國を許される筈であるという意味のことを武帝に書き送らせたのである。武帝は淵明の書を読んで大いに心を動かし、東魏との復交のことを朝臣に諮つた。傳岐は慎重論を主張したが大勢は和平に傾き、梁からも修交の使節が派遣されることゝなつた。

武帝が己を東魏に賣り渡そうとしているのを知つて侯景は「我固より吳老公の薄心腸を知る」と帝の非人情を怨み憤り、遂に太清二年二月壽春に於て叛を謀るに至つたと傳へられる。

これより先、彼は南朝隨一の名族王氏・謝氏との通婚を希望しその斡旋方を武帝に願ひ出たことがあつた。流石に武帝もこればかりは見込なしとみて「王謝は門高くして偶に非ず、朱・張以下に於て之を訪ふべし」と拒絶したので、景は憤懣に堪へずして「かならず吳の兒女をもつて奴に配せん⁽¹⁸⁾」と言つたという。

(五)

壽春にあつて反意を逞しくしつゝあつた侯景は、梁の宗室の一人である臨賀王正徳がかねてより武帝を怨みひそかに死士を養つて機會の到來を窺つてゐることを知り、正徳のもとに腹心を遣してこれが抱き込みを策した。正徳こそは梁にとつて全く獅子身中の蟲とも言ふべき存在であつた。

九月に權臣朱异らを誅するを名として兵を擧げ、東進して譙州（安徽省滁縣）を陥れ、ついで南下して歷陽（安徽省和縣）を降し長江北岸に達した。都官尙書の羊侃は兵を率いて采石（安徽省當塗縣西北）に據らんことを請うたが、朱异は侯景の兵力を見くびり極めて樂觀的な意見を吐いたので侃の議は葬られて了つた。如何に精兵とはいへ八千位の兵力では長江の守りを突破し無事に渡江出來ようとは常識的には考へ難いところであつた。それにも拘らず侯景の軍は極めて樂々とこの難事を成しとげたのである。それは新に平北將軍として國都防衛の重責に任ずることになつた臨賀王正徳が、ひそかに渡江の手引きをしたからである。横江から采石に渡つた侯景の軍は東進して慈湖に向つた。これを知つた建康政府は驚愕して直ちに宮城を修理し、食糧を運ぶなど應戰の準備に取りかゝると共に、宣城公大器をして城内の諸軍事を都督せしめ、羊侃を之に副たらしめることゝした他、夫々に部署を定めて防衛に遺憾なきを期した。

景の軍が朱雀桁の南に迫り來つたので、太子は東宮學士の庾信をして朱雀門を、臨賀王正徳に命じて宣陽門を守らしめた。太子は大桁（浮橋）を開いて賊の進撃を阻ばもうと企てたが正徳の反對に會つて實行されずに終つたゝめ、賊軍は朱雀桁を渡り朱雀門を突破し、ついで宣陽門から臺城へ無血入城した。

侯景は一氣に臺城を降そうと激しく攻め立てたが、羊侃らは死力を盡して防ぎ戦つたので城は容易に抜けなかつた。その上味方の損害も尠くなかつたので侯景はあせり出した。というのはこれ以上長びいては糧食の補給がつかないばかりか敵の援軍が雲集するおそれがあつたからである。

周知の如く南朝では皇弟や皇子を地方に派遣して都督や刺史とすることが盛んに行われ、當時梁でも湘東王繹を荊州刺史兼荊州都督に、河東王譽を湘州刺史に、岳陽王詵を雍州刺史に、當陽公大心を江州刺史に、南平王恪を郢州刺史に、武陵王紀を益州刺史に任ずるなど宗室をして各地の民政と軍事とを擔當させていた。これら梁の皇族が夫々大兵を提げて來り援けるのを侯景は懼れていたのである。

十一月朔日に景は臨賀王正徳を帝位に即かしめ、彼自らは丞相と稱し、次の如き檄を城中に送つた。

梁、近歲より以來、權倖事を用い、齊民を割剝し以て嗜欲に供す。如し然らずと曰はば、公ら試みに觀よ今日國家の池苑、王公の第宅、僧尼の寺塔及び在位庶僚の姬妾百室、僕從數千、耕さず織らず、錦衣玉食す。百姓より奪わずんば何くより之を得んや、僕闕庭に趨赴する所以は、權佞を指誅するなり、社稷を傾くるに非ず¹⁹。……

建康城を中心とする激しい攻防戦についてはこゝに逐一その經過を記述するのを避けて兩軍苦闘の狀だけを記すに止めた。

侯景軍は或は土山を築き、或は飛樓・橦車・登城車・登堞車・火車などの戦車や攻城具を作つて火箭を浴せかけたり、さては玄武湖の水を引いて臺城を水攻めにするなど祕術を盡して攻め立てた。

臺城内の籠城者は初め男女併せて十餘萬人おり、そのうち戦闘員は二萬餘いた。いよいよ籠城と決まるや男女貴賤みな米を負つて城内に運び入れその額は四十萬石に及んだ。ところが燃料や副食品の蓄えは甚だ乏しく、馬糧も不足していたので尙書省を壊して燃料とし、馬には薦をきざんで與えていたが、薦も盡きて米飯を食はせるより他なきに至つた。軍士も乾肉がなくなつて鎧を煮たり、鼠や雀を捕えて食つていたと傳えている他、南史に「軍人、馬を殿省の間に屠りて之を鬻ぎ、雜うるに人肉を以てす。食う者必ず病む²⁰」と見える如き事態の發生さえもみた。

味方の援軍は諸方より雲合してその數は百萬と稱せられたが、彼らは建康城の周邊に陣して包圍態勢を布くのみで一向に積極的な動きを示さない。それというのも梁の王族間に繼承の問題をめぐつて深刻な感情上の對立があり、彼らは事毎に猜疑の念に驅られ、容易に協力を期待出来ない事情にあつたからである。

侯景の軍も當時すでに糧食の缺乏に苦しんでいた際であつたから、有力な湘東王の援軍が荊州からまさに至ろうとしているのを聞いて侯景は王偉の言に従い窮境打開のため僞つて梁に和を請うことゝした。

流石の武帝もこの申出に對して「和するは死するに如かず²¹」とまで言つて容易に應じようとはしなかつたが、城内の窮狀見るに忍びないものがあるからとの太子の切なる請により遂に之を許した。

(六)

太清三年(五四九)二月乙亥に一旦和議は成立した。和議成立後直ちに臺城の圍みを解いて北歸するという約束であつたにも拘らず侯景は種々口實を設けてこの約束を履行しないばかりか、鎧仗を修めたり、東府の米を石頭に運ぶなどし

きりに戦備を整えていたが、二月の末に至り、武帝の十失を數え立てた宣戰布告狀を叩きつけた。城内でも三月朔日に景の違盟を天地に報告して氣勢を上げてみたものゝ、包圍を受けること既に久しく、浮腫と息切れに苦しむ者多く、籠城者の大半は死亡して戦闘力のあるものは四千人に滿たず、しかもそれらの人々は何れも極度の疲勞に陥っていた。道路には死體が至るところに横はり、埋葬も出來ないまゝに腐爛した屍體からは液汁が流れて溝に滿ちるといふ慘憺たる狀景を呈した。城内では味方の救援を一日千秋の思いで待ちあぐんでいたが援軍の總司令柳仲禮は妓妾を聚めて酒宴に耽るのみで一向に動く氣配は見えず、臺城は遂に見殺し同様の狀態で三月十日に陥落した。

永安侯確から落城の報を聞いた武帝は「我よりして之を得、我よりして之を失う、また何をか恨まん(22)」と言つたと傳えられるが、この諦めにも似た心境はやはり佛敎的諦觀に由來しているのであるか。

小論の初めの方で一寸觸れて置いた武帝の侯景への賜調は落城の直後に行われたもので、その時の武帝の態度は神色自若たるものがあつたに引換え、景は帝の顔を仰ぎ見ることさえ出來ず、その顔には油汗が流れるのみであつた。退出後、景はその親臣の王僧貴に次の如く語つてゐる。

吾常に鞍に據り敵に對し矢刃交々下れども意氣安緩にしてついに怖るゝ心なし。今蕭公を見るに、人をして自ら懼れしむ。豈に天威犯し難きものに非ずや。吾再び之を見る可からず。(23)

侯景は乘輿や服御や宮女を掠め取り、朝士や王侯を捕えて永福省に送つた上、詔を矯めて大赦し、自ら大都督中外諸軍事、錄尙書事を加え、ついで詔命を以て外援の軍に解散を命じた。裴之高・王僧辯らは決戰を主張したが容れられず結局援軍は圍みを解いて本鎮に引き上げた。

こゝに哀れを留めたのは臨賀王正徳で、彼は侯景のためにさんざんに利用された揚句、見棄てられたのを知つて悔悟の念に驅られ、入つて帝に見え泣いて罪を謝した。帝はそれに對してたゞ「如何に泣いたとて今更どうにもなるものではない」と言つたのみであつた。

今や武帝は完全に侯景の制するところとなるに至つたが、心中甚だ平かならざるものがあり、何かにつけてそれが表面に表われるので侯景の武帝に對する待遇も粗略となり、飲膳さえも節減されるという有様となつた。帝は憂憤の餘り遂に病床に臥す身となつた。五月丙辰、帝は口中が苦いので蜜を求めたけれども得られず、二度「荷荷」という聲を發して息を引きとつた。年八十六。二十五日後の五月辛巳に始めて高祖の喪が發せられ、同じ日に簡文帝の即位をみた。

その翌日侯景は矯詔して北方出身者で梁に奴婢となつてゐる者を解放してゐる。固よりこれは喰はずに恩を以てした景の人心收攬策で、この時解放された奴婢の數は萬を以て計る程あつたというから、これはなかなか侮り難い力となり得る可能性を有していたわけである。

こゝで魏書の烏夷蕭衍傳をのぞいてみよう。そこには

城陷るの後、江南の民及び衍の王侯妃主、世胄の子弟、景の軍人の掠むる所となり、或は自ら相賣鬻し、漂流して國に入る者、蓋し數十萬口なり、加うるに饑饉を以て死亡し、所在に地に塗れ、江左遂に丘墟となる
と、建康陷落後の江南の慘狀を述べ、多數の人口が北へ流れ込んで行つたことを記しているのが注目される。通鑑も當時に於ける建康人士の風尚とその困窮の狀とを次の如く傳えている。

高祖の末、建康の士民、服食器用、争うて豪華を尙び、糧は半年の儲なく、常に四方の委輸に資る。景が亂をなして

より道路斷絶し、數月の間、人相食むに至るも猶ほ餓死を免れず。存する者、百に一二なし。貴戚・豪族皆自ら出でて稻を採る。溝壑に填委するもの勝けて紀す可からず²⁴⁾

この頃（太清三年十一月）たまたま百濟の朝貢使が來朝し、兵火のために城闕が荒廢して舊觀を留めないのを見て感慨に堪えず、端門に號哭したので侯景は怒つてこれを莊嚴寺に録送し、外出を許さなかつたと傳えられている。²⁵⁾

わが國では欽明天皇の十年に當つているが、日本と梁との交渉は、梁書武帝紀の天監元年（五〇二）の條に「倭王武を進めて征東將軍と號す」と見えるのを最後として杜絶えて了つたらしく、侯景亂に關する記載はわが國の記録には全然見當らない。

(七)

この邊でしばらく地方に於ける動きを眺めてみたいと思う。この年の五月に侯景は來亮らをして宛陵（安徽省宣城縣）を攻略させたが失敗し、別に侯子鑿を吳郡（江蘇省蘇州）に入らしめ、蘇單于を以て吳郡の太守となし、宋子仙らをして東して錢塘（浙江省杭州）に屯せしめた。吳興の太守張暉は兵を擧げてこれを討つたが衆寡敵せず九月に執へられて建康に送られ子弟十餘人と共に害せられた。

侯景は簡文帝を挾んで建康に據つたがその號令の行われる所は極めて狭い範圍に過ぎなかつた如くで、梁の上下は希望を湘東王繹に寄せていた。時に揚子江上流地方では宗室の紛争が絶えず、襄陽にいた岳陽王詵は湘東王繹との不和から自ら存する能はざらんことを恐れて使を西魏に遣しその附庸たらんとを請うてをり、詵の弟の河東王詧は長沙に於て

王僧辯のために執へられて斬られ、邵陵王綸も湘東王繹の攻めるところとなつて汝南に於いて死し、益州の武陵王紀と湘東王との間も次第に險惡となりつゝあつた。一方侯景は自ら宇宙大將軍都督六合諸軍事と稱し、簡文帝の女溧陽公主に尙して甚だ之を寵愛したために政事を妨げるに至つたと稱せられる。

大寶二年(五五一)六月侯景が王僧辯と巴陵(湖南省岳陽縣)に戦つて大敗するや、王偉は「古より鼎を移すには必ず廢立を須ふ。既に我が威權を示し、且つ彼の民望を絶つべし」と景に廢立を勧め、簡文帝を廢して昭明太子の嫡孫の豫章王棟を立てた。簡文帝は廢されて後殺され、哀太子器・尋陽王大心ら二十餘人も害せられた。豫章王は八月壬戌から十一月己丑まで在位し侯景に位を禪つた。景は漢帝と稱し、太始と改元した。

簡文帝が弑せられたとの報を聞いた湘東王繹は王僧辯と陳霸先とをして力を合せて景を討たしめ大いに之を破つた。侯景は建康を捨て、南に奔り松江(吳淞江)より海上に逃れんとしたが果さず、承聖元年(五五二)四月、船中に於て羊鯤らの手にかゝつて斃れた。景の屍は建康に送られ、その首は江陵に、その手は北齊に送り届けられた。景の屍が市に暴されると建康の士民は争つて之を食い「骨を并せて皆盡く」と稱せられたが、その中に溧陽公主も混つていた。侯景の子らも東魏に於て世宗(高澄)の時に長子は面を剝かれて煮られ、他の四子は宮刑に處せられている。

(八)

侯景の亂に建康は尠からず荒廢したが、その他の地方も兵禍の及んだところは大多なり小なりその害を蒙つてゐる。即ち三吳の如きも

晉氏が江を渡つてより三吳最も富庶となす。貢賦・商旅皆其の地に出づ。侯景の亂に及び、金帛を掠めて既に盡き、乃ち人を掠めて之を食い、或は北境に賣り、遺民殆ど盡く⁽²⁷⁾

という有様であつた。加うるに大寶元年(五五〇)には江南地方一帯は旱蝗の害に遭い、

年穀登らず百姓流亡し、死者地に塗れ、父子手を攜へて共に江湖に入り、或は弟兄相要めて俱に山岳に緣り、芟實荇花皆罄き、草根木葉之がために凋殘す。命を假ると雖も須臾にして、また終に山澤に死す。其の粒を絶つこと久しき者は、烏面鵠形、牀帷に俯伏す。戸牖を出でざる者は、羅綺をき、金玉を懷にせざるはなく、交々相枕藉して命を待ち終るに聽す。是に於て千里烟を絶ち人跡見ることを罕に白骨聚を成し、丘隴の如し⁽²⁸⁾、

と形容される程であつた。顔之推もその觀我生賦の中で「野は蕭條として以て骨を横たへ、邑は闕寂として煙無く」と詠じ、更に「中原の冠帶、晉に隨いて江を渡りし者百家、故に江東に百譜ありき、是に至りて都に在りし者覆滅して略盡く」と注している⁽²⁸⁾

以上に引用したところによつて南朝の人士がこの亂により多大の損害を蒙つたことが知られるのであるが、一體その被害が事實どの程度に及んだかを更に具體的に把握し度いという希望は當然起つて來なくてはならない筈である。そこで梁書・陳書・南史などからこれに關する記事を拾い集めてみることにした。幸にそれらの諸書にはこの際に於ける人々の態度や動向などを窺うに足る記事が散見して可成り興味深いものがある。

(a) 先づ兵禍を避けて地方に逃れた人々の避難先きについて見るに、やはり郷里に歸つたという例が最も多く、劉之遴(南陽涅陽人)⁽³⁰⁾ 虞荔兄弟(會稽餘姚人)⁽³¹⁾ 吳種(吳郡人)⁽³²⁾ 姚察(吳興武康人)⁽³³⁾ などがそれに屬している。しかしその時期

が何時であつたか判然としないものが多い。

陳書の蕭允傳に「侯景臺城を攻陥するや百僚奔散す。……時に寇賊縦横なり、百姓波駭し、衣冠士族、四出奔散す」とあつて、始めはみな可成り樂觀的であつたので避難する者も案外少なかつたのではないかと思われるが、臺城の陥落後は、食生活の困難や政局の不安などから人々は争つて地方に疎散した。

會稽に逃れた者に江總(34)・顧野王(35)・王元規(36)らがあり、そのうち江總は更に會稽より廣州へと奔り、顧野王の方は東陽に赴いて劉歸義と力を協せて賊を拒いでいる。通鑑の太清三年十二月の條をみると「三吳盡く景に没す。公侯の會稽に在る者、俱に南して嶺を度る」とあつて、一旦會稽に逃れ、それより更に嶺南に奔つたものが可成りおつたらしく想像される。陳書卷三〇によると傳緯は「太清の末に母を携へて南に奔り難を避」けたとあるが肝心の行先きが書かれていない。また章華は、嶺南にのがれて羅浮山寺に住し専心習業していたのを歐陽頎に招かれて南海大守となつたと伝えられている。

當時、朝士の湘東王繹のもとに歸するものが頗る多く、徐儉の如きも老幼を伴つて江陵に赴いているが、蕭允の弟で西昌侯儀同府の主簿であつた引は宗室間の不和と軌轢の激化をみて、家人に向つて説いて言うには

諸王力争し、禍患方に始まる。今日難を逃れん。未だ是れ君を擇ぶの秋にあらず。吾が家は再世始興郡(廣東省曲江縣東)を為む。遺愛民に在り、正に南行して以て家門を存すべきのみ(38)

と。こゝに於て弟の形、及び宗親ら百餘人と共に嶺表に奔つて歐陽頎に頼るに至つた。侯官(福建省閩侯縣)の令であつた徐伯陽もまた海路から廣州に赴き一時蕭勃に依つたが永定元年(五五七)勃が殺されるに及んで吳郡に歸つた(39)。その

他杜之偉(40)の如く一時的に山澤に逃竄したものは恐らく夥しい數に上つたことである。

(b) 亂中亂後に於ける都人士の生活は頗る難澁を極めた如くで、それについても次の如き徐孝克夫妻に關する數奇な物語などが傳つている。陳書の原文を左に引用してみよう。

性至孝なり。父の憂に遭い、殆んど喪に勝へざらんとす。生む所の母陳氏に事へて就養の道を盡す。梁末、侯景の寇亂に京邑大いに饑え・餓死する者十に八九なり。孝克母を養うの餽粥、給する能わず。妻は東莞の臧氏、領軍將軍臧盾之の女なり。甚だ容色あり、孝克乃ち之に謂いて曰く、今饑荒かくの如く供養ももごも闕く。卿を嫁して富人に與えんと欲す。彼此俱に濟われんことを望むなり。卿の意に於て如何ぞやと。臧氏之を許さざるなり。時に孔景行なる者あり、侯景の將たり、財に富めり。孝克密かに媒者に因りて意を陳ぶ。景行多く左右を從え逼りて之を迎う。臧氏涕泣して去る。得る所の穀帛は悉く以て養に供す。孝克また剃髮して沙門となり名を法整と改め、兼ねて乞食して以て給に充つ。臧氏も亦深く舊恩を念い、私に饋餉を致し、故に乏絶せず。後、景行戰死す。臧、孝克を途中に伺い、累日乃ち見え、孝克に謂いて曰く、往日の事は相負くがために非ず。今既に脱るゝを得たり。當に歸りて供養すべしと。孝克默然として答えなし。是に於て俗に歸り、ふたゝび夫妻となる(41)。

(c) 佛教盛行の時代であつただけに、司馬申(42)や、虞荔(43)の如く、動亂のさ中に父や母を喪ひ、充分に子としての道を盡し得ないのを憾んで自ら誓つて終生肉食しなかつた人もおつた。阮卓は十五才のとき父を失い、都から江州に赴き、父の

遺骸を奉じて歸る途中侯景の亂に遭い賊兵の執えるところとなつた。やつれ果てた幼い彼が事情を訴えて號哭するのを見て賊もこれに同情し境界まで護送してくれたといふ⁽⁴⁴⁾。なお陳書にはこの騷亂の只中にあり乍らもよく禮制の規定通りに三年の喪に服した人として孔奐と後に述べる張種の二人を特筆している⁽⁴⁵⁾。

(d) この亂に生命を失つた者は、臺城に於ける籠城者だけでも相當の數に上つており、その他各地で戦死したり、執へられて殺されたりしている例が列傳の隨所に散見している⁽⁴⁶⁾。

蕭子雲も王筠も直接賊手に斃れたものではなかつたけれどもやはり戦亂の犠牲者たることに變りはなかつた。蕭子雲は太清元年に侍中國子祭酒となり南徐州の大中正を領していたが、翌年侯景の軍が迫り來るに及んで官を棄て、民間に逃れ、三年三月臺城が陥るや、更に東して晉陵（江蘇省武進縣）に奔り、顯靈寺の僧房に於て遂に六十二才で餓死している⁽⁴⁷⁾。

王筠はさきに賊のために自宅を焼け出されて、蕭子雲邸に同居しておつたが、一夜盜賊が同家に侵入してきたので驚き怖れて外に飛出し井戸に墜ちて不慮の死をとげた。これなどはやはり一種の戦争ノイローゼとみるべきであらう。

また沈文阿⁽⁴⁷⁾と沈炯⁽⁴⁸⁾の様に死の一步手前で偶然に救はれた例も見出される。前者は侯景の追究に會つて身を置くところなく吳興附近の山に逃れて縊死を圖つたところを來合はせた知人に救われたものであり、後者は處刑寸前に身を躍らせて脱走し運よく難を免れ得たものである。

大量に殺戮を蒙つているのは何と言つても梁の宗室であるが、それらの人々のことは此處では除外して置きたい。そ

れに次いで大きな被害を蒙つたと思われるものに韋氏がある。⁽⁴⁹⁾

韋粲は漢の丞相賢以來世々三輔の著姓として知られた京兆杜陵の韋氏の出である。祖父の叡は梁朝創業の功臣の一人で、官は侍中に至り永昌縣侯に封ぜられており、その長子の放は即ち粲の父で、幾度か武功を立て、北徐州刺史に拜せられているが、彼は吳郡の張率との指腹婚の逸話によつて殊に有名である。

粲は少にして父の風ありと稱せられ、學を好み意氣に任ずるの概があつた。太清二年に衡州(廣東省含滄縣)の刺史より召し還されて散騎常侍に拜せられて廬陵(江西省吉安縣)に至つたところ、たまたま侯景の亂を聞き、江州刺史當陽公大心のもとに馳せ參じ、外弟に當る司州刺史柳仲禮や西豫州刺史裴之高、宣猛將軍李孝欽、前司州刺史羊鴉仁らと力を合せ急ぎ建康の救援に赴いた。粲が引き受けたのは最も困難な青溪塘方面からの攻撃であつた。粲の軍は折柄の濃霧のために道に迷い、充分に戦備を整える暇のなかつたその虚を衝いて敵は襲撃してきた。粲の左右の者は粲を牽いて賊を避けしめんとしたるも、彼は頑としてその場を動かさず、子弟を叱咤して力戦したが遂に敗れて子の尼及び助・警・構の三人の弟や従弟の昂らと共に討死し、その他一族の戦死するもの數百人に及んだ。賊軍は粲の首級を闕下に傳へ以て城内に示した。太宗簡文帝はこれを聞いて「社稷の寄る所、惟だ韋公にのみ在り、如何ぞ不幸にして先に行陣に死するや」と流涕したと言はれる。なお粲の子臧(尼の兄)も大寶元年七月、建昌(江西省永修縣)に於て麾下の兵の殺すところとなつた。か様に粲の肉親多數が侯景の亂に戦死し甚だしい痛手を蒙つてはいるが、しかしこれによつて南渡せる韋氏が全面的に歿落したと見るのは早計である。何となれば粲の三人の伯父、正・稜・黯はとも角も天壽を全うしており、正の子の鼎(昂の弟)は梁の元帝に仕えて中書侍郎となり、のち陳に仕えて太府卿にまで至り、陳亡んで後に隋

に歸した。時に隋にあつては韋世康が吏部尙書として時めいていた際であつたので、文帝の斡旋によつて改めて康と宗族の好を修めた。その時鼎は韋氏譜七卷を作つてこれに示し大いに歡飲したことが南史に見えている。

吳興の太守張嶮が侯景の行臺劉神茂の遣した降伏勸告使を斬つて飽くまで抗戦したが衆寡敵せず、太清三年九月遂に執へられて建康に送られ、子弟十餘人と共に斬殺されたことは既に述べた。彼は東南の物望を以て稱せられた吳郡の張氏の出で曾祖父張裕以下の傳が南史卷三二に見えている。嶮の從弟に種というものがおり、始豐の令となつていたが、侯景の亂が發生するや母を奉じて郷里に逃れ歸つた。亂が平いで後、王僧辯の推薦で江陵に出仕し、ついで陳に仕へて中書令金紫光祿大夫にまで至り頗る時の推す所となつていた。太初の初年にその女は始興王の妃に選ばれており、種の弟の稜も司徒左長史となつていて、兄弟ともに南朝の政界に可成りの地位を占めていたことが知られる。

陳郡の謝氏の一員である謝貞(50)の傳によれば「太清の亂に親屬散亡し、貞・江陵に陷没し」北周に留ること二十年、太建五年(五七三)に漸く南に歸り、尙書駕部侍郎や始興王叔陵の主簿などを歴任し至徳三年に六歳になる一子靖を遺して歿したことが記されていて、その人生行路はまことに多難なるものがあつたらしく推察される。

か様に侯景の亂に南朝の貴族は何れも甚大な打撃を蒙り乍らも、なお致命的な破局は免れ得たのであつた。尤もこれは主として政治面からする觀察であつて、その經濟面に關する考察は殘念ながら材料も乏しくこれを明かにするを得ないけれども、この亂が一時的にもせよ彼らの生活の本據を荒廢に歸せしめたと傳へられているところを以てすればその方面の被害も決して尠くなかつたに相違ない。それにしても岡崎文夫博士が魏晉南北朝通史に於て「事實侯景の亂に於て南朝第一の名家王氏の一族全く亡び(51)」と言つておられるのはいさゝか誇張に過ぎはしないであろうか。王克の如く侯

景に仕えていたく名族瑯邪の王氏の聲望を傷つけたものも出たには出たが、そのために一族全く亡び去つたといふことはなく、陳書には王沖・王通・王勣(卷一七)王質(卷一八)王固(卷二一)王瑒(卷二三)ら王氏一族の傳が夫々立てられていて、彼らが特權階級としての座から轉落するまでには、なおしばらくの歲月を要したことが知られる。

(註)

- (1) 宮崎市定博士 九品官人法の研究第二編第四章
- (2) 梁書 卷五六
- (3) 南史 卷八〇
- (4) 梁書、卷四二、傳岐傳
- (5) 通鑑卷一六二、太清三年九月
- (6) 梁書 卷四五 王僧辯傳
- (7) 南史卷八〇、通鑑卷一六四、大寶二年十一月
- (8) 南史 八〇
- (9) 梁書卷五六、北齊書卷二神武紀
- (10) 通鑑卷一六〇 太清元年二月
- (11) 同前、並に梁書本傳
- (12) 同前、並に梁書卷二四周弘正傳
- (13) 通鑑卷一五七、大同二年三月、梁書卷五六
- (14) 梁書卷三七 何敬容傳
- (15) 梁書卷五六。北齊書卷三文襄紀

侯景の亂についての一考察(竹田龍兒)

- (16) 通鑑卷一六〇、太清元年十二月、魏書卷九八
- (17) 梁書卷四一、肅介傳
- (18) 南史 卷八〇、通鑑卷一六一、太清二年八月。
- (19) 通鑑卷一六一、太清二年十一月、
- (20) 南史卷八〇。魏書卷九八 烏夷肅衍傳
- (21) 通鑑卷一六二 太清三年二月
- (22) 同前、三月丁卯の條、
- (23) 梁書卷五六
- (24) 通鑑卷一六二 太清三年五月
- (25) 梁書卷五四 諸夷傳。通鑑卷一六二 太清三年十一月
- (26) 通鑑卷一六四、承聖元年四月。梁書卷五六
- (27) 通鑑卷一六三、大寶元年五月
- (28) 南史 卷八〇
- (29) 北齊書卷四五 顏之推傳
- (30) 梁書卷 四〇
- (31) 陳書 卷一九
- (32) 陳書 卷二一
- (33) 陳書 卷二七
- (34) 同前
- (35) 陳書 卷三〇
- (36) 陳書 卷三三

- (37) 陳書 卷二六
- (38) 陳書卷二一蕭允傳
- (39) 陳書卷三四 徐伯陽傳
- (40) 同前
- (41) 陳書卷二六 徐孝克傳
- (42) 陳書 卷二九
- (43) 陳書 卷一九
- (44) 陳書 卷三四 文學傳
- (45) 陳書 卷二一
- (46) 陳慶之・蘭欽梁(梁書卷三二)、江革(梁書卷三六)、杜岸(梁書卷四六)、任孝恭(梁書卷五〇)
- (47) 陳書 卷三三
- (48) 陳書 卷一九
- (49) 南史五八章叡(梁書卷一二)、章放(梁書卷二八)、章粲(梁書卷四三)
- (50) 陳書 卷三二 孝行傳
- (51) 魏晉南北朝通史 三一八頁